研究ノート

長倉美恵子: 新しいアメリカ図書館学を学び世界と交流した研究者
(1933年1月–2020年10月)

前川和子

(元大手前大学教授・桃山学院大学特別研究員)

Mieko Nagakura: A researcher who learned new American library
science and interacted with the world

By Kazuko MAEKAWA, Ph.D.

(Researcher at St. Andrew's University)

抄録

長倉美恵子は第2次世界大戦後、1955年に日本図書館学校にてアメリカの最新の図書館学教育を受け、1956年にフルブライト交換留学生として西ミシガン大学に入学した。卒業後自ら進んで、ニューヨーク公共図書館の児童図書館員として働いた。帰国後は大学で司書養成教育を行った。長倉は学校図書館の専門家として、全国学校図書館協議会 (SLA) や日本学校図書館学会 (JSSLS) の活動に参加した。また、西ミシガン大学の指導教員たちとともに、国際学校図書館協会 (IASL) の活動にも積極的に参加して、極東地域理事として、名誉会員として活躍した。

Abstract

After World War II Mieko Nagakura entered the Japan Library School in 1955 and received the latest American library science education. She entered Western Michigan University in 1956 as a Fulbright exchange student. After graduating, she wanted to work as a children's librarian at the New York Public Library. After returning to Japan, she provided librarian training education at the university. As a school library expert, Nagakura participated in the activities of the National School Library Council (SLA) and the Japan Society of School Library Science (JSSLS). She also actively participated in the activities of the International School Library Association (ISLA) with the Western Michigan University academic advisors. And she was active as an honorary member as a director of the Far East region.

1 はじめに

長倉美恵子は第2次世界大戦直後、最新のアメリカ図書館学の教育を受け、戦後の日本の若者に司書養成教育を行った。そして、日本と世界の学校図書館界に貢献した人物であった。

長倉を知るにはまとまった資料といえるものが2点ある。1つは実践女子大学定年退職記念講演会の配布資料『長倉美恵子教授最終講義 (以下、『最終講義』)』(2003年1)であり、もう1つは、長倉

自身が2014年に『留学・血筋』2)という私家版を編んでいる。本稿は長倉の全体を把握するほどの資料・情報を取得していないと思えるにもかかわらず、これらを中心に長倉の87年間をひも解こうとした。長倉の評伝書は今後書かれると思うが、今存在する正確な情報を挙げておくことにより後世の研究者の一助になることを願うためである。

長倉は1933年1月徳島県に生まれ、幼少期に栃木県に移り、大学は東京女子大学文学部に入学したが、1953年に東北大学文学部3年に編入学した。『留学・血筋』の「履歴書」から東北大学入学以降の学歴を以下にあげる。

1953(昭和28)年4月に、東北大学文学部英文科第3年次編入学し、1955(昭和30)年3月に同大学を卒業した。同年4月慶應義塾大学文学部日本図書館学校入学し、1956(昭和31)年3月に、同学校を修了した。同年9月にアメリカ西ミシガン大学大学院修士課程(図書館学専攻)入学し、1958(昭和33)年2月に同大学を卒業した。この年から4年後の1962(昭和37)年9月に、インディアナ大学大学院修士後期課程(図書館情報学専攻)入学し、1963(昭和38)年8月に同大学を退学した。この時は短い期間であったが、2度目のアメリカでの学業であった。

2 日本図書館学校

1955年3月東北大学を卒業後したすぐ後に、慶應義塾大学文学部日本図書館学校(JLS)の第5期生として入学し、翌年卒業した。JLSは良く知られているように、敗戦後の日本に進駐したアメリカGHQが日本の民主化のために推進したもののひとつであった。それゆえ当時のアメリカから教授が招かれ、最新の図書館学が教えられることとなった。その講義は英語でなされ、各教授には専任の通訳がついた。1956年は1951年4月の開学から5年目であったので、一部日本人教授に交代するという時期でもあった。藤川正信(1922-2005)は、この学校の第1期生であり、同時にレファレンスワークを担当したF.チェニー(Frances Neel Cheney, 1906-1996)の専任の通訳者でもあった。彼はその後F.チェニーの勤務先であるピーボディ大学に留学し1955年からJLSの専任講師となった。そして、1956年はレファレンスワークを担当していた。

長倉はF.チェニー教授に直接教えを受けなかったが、彼女の日本での直弟子ともいえる藤川からレファレンスワークの講義を受けたのであった。「やんちゃな藤川先生はチャーミングで、受講生の人気の的であった」と長倉は語っていた。また、長倉はJLSに在学中「経済的に厳しいので」校長のR.ギトラー(Robert L. Gitler, 1909-2004)に頼んで、アルバイトを斡旋してもらったようだ。

当時、JLSの教員はほとんどが米国人で、日本語が読めない。そこで教員達が参考のために読む日本語の雑誌や新聞記事は英文に翻訳する必要があった。また、学生のレポートやテスト解答も日本語だから英文に翻訳された。この翻訳の仕事がJLSでの大きなアルバイト源であったのである。

と長倉は説明している3)。また、彼女は「JLSのハードなカリキュラムと宿題を経験したので、その後留学した時は、この学校で学んだので、アメリカでの講義の全てが良く分かった、困らなかった」と語った。このことは文章としても残している4)。

…ニューヨーク公共図書館に勤務したことがある私は、JLSでの教育は米国においては当然のこと、国際的にも通用するレベルの高いものだと実感していた。…

JLSを1956年3月に卒業後、4月1日から英語担当として埼玉県立浦和西高等学校教諭として働いた。しかし、同年7月31日付けで退職し、9月に西ミシガン大学に入学したのであった。

3 アメリカへの留学

3.1 西ミシガン大学大学院修士課程

1956年9月フルブライト留学生として、日本を出発した。終戦後10年以上経っていたとはいえ日本は復興途中の大変な時代であった。人々は新しい生活への希望はあるが、まだまだ貧しく混迷の時代であったといえよう。このような時代に、若き長倉がアメリカの図書館学を求めて氷川丸に乗り留学したのであった。大変な勇気と強さを持っていたといえよう。アメリカ西ミシガン大学図書館学科(Western Michigan University, Department of the Librarianship)大学院に入学し、児童および学校図書館学を専攻した。ALA公認図書館学校であった。長倉は同大学スタッフとその当時の自分の仕事が次のようであったと説明している。

西ミシガン大学図書館学科のスタッフは教授が2名、准教授1名、講師(学科図書館主任兼任)1名、研修用附属学校図書館主任1名で、筆者は院生助手(graduate fellow)として勤務し、学科のファイル資料等の整理を仕事にしていた。5)

そこでマスター・オブ・アーツの学位を取得し卒業した。長倉はアメリカへの特別な思いを吐露したことがある。それは『留学・血筋』に図入りで記録されている。「解説」に次のような説明がある6)。

写真等で最も注目していただきたいのは「フルブライト交換留学生用米国入国査証申請書(和文、英文)」である。米国は留学生が卒業後も米国に止まることを非常に恐れていた。つまり、発展途上国の若者達が留学を契機にして、豊かな米国に定住してしまうことを回避しようとし、「アメリカ合衆国における交換視察終了後少なくとも総計2年間アメリカ合衆国以外の国に居住する必要がある事を承知しております」という入国査証申請書に署名させられたことである。

当時のアメリカは世界の若者を招き学ばせたが、母国に帰ることを条件に受け入れていたのであった(日本以外の国はどうだったかは詳しくないが、ともいっている)ということを経験した長倉は複雑な思いで了解したようだ。

西ミシガン大学の図書館学科は、1945年に学校図書館職員と農村地域の小規模公共図書館の専門職員を養成する目的で設置された。長倉は大変丁寧に自らが学んだ大学の記録を前出の『留学・血筋』に残している。すべて和訳されている。1956年当時のこの分野の教育内容を具体的に知ることができる。この記録内容は60年以上前の教育内容を今につたえているのであるが、JLSの教育内容

に興味をもち調べているものにとり格別に貴重なものに思える。ところで、西ミシガン大学での教育方法は、講義の課題について学生が調べ研究した結果を、クラスで議論するという方法がとられているので、JLS で学んだ長倉にとっては違和感がなかったのである。内容は以下の通りである 7)。

西ミシガン大学大学院図書館学科 修士課程履修科目・時間割 1956.9～1958.2

西ミシガン大学大学院図書館学科シラバス 1956～57 年度 図書館学基礎

西ミシガン大学大学院図書館学科シラバス 1956～57 年度 教育カリキュラム

西ミシガン大学大学院図書館学科シラバス 1956～57 年度 カリキュラム強化資料

アメリカの図書館学部や学科は、アメリカ図書館協会の認定校 (accredited school) かどうかが重要な問題となる。西ミシガン大学大学院図書館学科は、1985 年に学科を廃止している。同書には、大学の年代記も記録されている。

4 ニューヨーク公共図書館員と児童文学、再度の留学

西ミシガン大学は卒業後の長倉に、アメリカで働く場所を用意しようとしたが、彼女はそれを断って自ら求めてニューヨーク公共図書館児童司書に応募し採用された。この選択はこの時代の彼女の夢にも関係があったようだ。彼女は児童文学作家になりたいと考えていたのである。長倉のあこがれは M. H. エッツ (1895-1984, Marie Hall Ets) 8) であり、いつか彼女のような作家になりたいと考え作家活動への努力もしていたという。そのような彼女に幸運が飛び込んできた。その時の状況を下記のように記している。

筆者は 1959 年、ALA 年次ワシントン大会におけるニューベリー・カルデコット記念晩餐会で、有名な出版社 Viking の児童書編集部長のアニス・ダフ (Annis Duff) 女史 (『つばさの贈り物』京都修学社 2009 年刊の著者) と同じテーブルに着くという幸運に恵まれた。彼女の紹介でニューヨーク在住中に、筆者はカルデコット賞授賞児童絵本作家であるマリー・ホール・エッツ (Marie Hall Ets) さんの自宅を訪問し、その創作状況をお見せ頂くと共に、絵本創作のコツをお話いただいたり、手作りの夕食までご馳走になってしまった 9)。

という夢のような体験をしたのであった。しかし、M. エッツ訪問をきっかけに、長倉はすっぱりと作家志望に終止符を打ったという。その理由をきくとエッツさんの職場をつぶさに見せて頂き「彼女の創作はそれは見事で、これは自分には到底無理だとわかった」からだったという。

1958 年 2 月 10 日からアメリカニューヨーク公共図書館児童司書として働くことになった。『長倉美恵子教授最終講義』には、その時の人事部長 (Chief of the Personnel Office) Alan L. Heyneman が長倉に宛てた手紙が掲載されている。ニューヨーク公共図書館のスタッフとして受け入れるという手紙には、仕事内容と給料のことが書かれている。仕事は分館の児童図書館員として、図書の選択、ストーリーテリング、学校との協力、読者への助言プログラムなどあり、給料は月 333.33 ドルであった。日本円にすると約 13 万円、当時の日本での大学卒のサラリーマンが 1.3 万円といわれた時代であった。長倉はアメリカの豊かさに驚き、それと同時にアメリカの大学でマスターを取得し、

ニューヨーク公共図書館に就職した自分に自信を持ったのではないだろうか。ニューヨーク公共図書館で働き始めた時、先輩司書からアドバイスを受けた。「司書はスーツを着て胸にジュエリーをつけなさい。そうすべきお仕事で、それができるくらいの給料をもらっているはずよ」と言われたとのことである。長倉からその話をきいた日本の司書は、今はとてもそのような地位にはないが、そうなれるよう頑張りたいと思ったものであった。そして後年、長倉が『図書館雑誌』でエプロン姿の日本の司書に親しみと応援のエッセイを書いているのを読んだ時、40年後のアメリカと日本の差を、40年間の長倉の心の変化を感じたのである。1958年のアメリカでの長倉は、日本とはかけ離れた豊かさ新しさに目を奪われたのであった。その一つが若い長倉がたくさん購入したという当時のファッションであった。ニューヨークで流行の服をたくさん買って日本に持って帰ったら、親戚に「変な服を着て」と言われ、のちに手放したそうである。

1959年8月31日に退職したので、彼女のアメリカでの生活は約1年6か月の児童司書生活となった。

帰国後、1959年10月28日から在日米国大使館文化交換局、東京アメリカ文化センター図書館司書補として働いている。

その後1960年2月に長倉は結婚した。夫君がやはりフルブライト交換計画により、1962年10月から1963年11月までインディアナ大学に留学することになり彼女も同行することになった。そのため1962年8月31日東京アメリカ文化センターを退職し、1962年9月にインディアナ大学大学院修士後期課程(図書館情報学専攻)に入学することになり、再びアメリカで学ぶことになったのである。

5 活動と業績

5.1 日本での活躍: 帰国後

夫君長倉繁麿の帰国に合わせ1963年8月にインディアナ大学大学院修士後期課程を退学して帰国した。

長倉の年譜によると、1963年8月1日～1964年3月31日は、全国学校図書館協議会嘱託で翻訳を担当し、続いて1964年4月1日～1965年3月31日は、目白学園高等学校講師、同年4月16日～1966年3月31日は日本体育大学兼任講師、同年4月1日～1965年5月20日までは宇都宮大学学芸学部講師で、いずれも留学生活を送って会得した英語を生かして教えている。

長倉が本格的に図書館専門の正規職に就いたのは、1965年5月1日の図書館短期大学助手からである。さらに1968年6月1日に国立教育研究所(現国立教育政策研究所)附属教育図書館司書となり、図書館情報学の専門教員としての生活を送ることになった。1974年7月1日、国立教育研究所主任研究官となった。

1985年4月1日東京学芸大学教育学部助教授(図書館学)に就任し、1987年2月1日に教授となった。さらに1992年4月1日からは同大学大学院教育学研究科担当となった。1996年3月31日に定年退職したとき、同大学『教育学研究年報』10)に「長倉美恵子教授退官記念」が編まれた。そ

ここに長倉の論文「図書館員の専門性と身分についての一考察: 米国における大学図書館員の教員身分をめぐって」が掲載されている。この論文のテーマは、後述する 1977 年日本図書館協会主催「米国西海岸図書館見学ツアー」で、現地の大学図書館で実際に出会った問題でもあった。1 年の後、1997 年 4 月 1 日に長倉は私学の実践女子大学文学部教授(図書館学課程)に就任した。彼女はここでの教員生活を大変好ましいと語っていた。私立大学の実践女子大学において、彼女は楽しく過ごせたようであった。2003 年 3 月 31 日に同大学を定年退職した。

このように詳しく長倉の職歴を見ることができるのは、『留学・血筋』に丁寧な自己の職歴が記録されているためである。そして、それとともに、「職歴(兼務)」という項目もあり、これには単に非常勤講師として働いた大学名などの任用機関と担当科目が列挙されているだけでなく、長倉を任用した教員の名も記されているのである。これは長倉を招いてくれた教員への感謝の表明であろうが、同時にこれを見るわれわれにとっては当時の司書課程担当教員との交流を知るうえでも興味深い情報といえるであろう。それは、1969 年 8 月から始まる。上記の本務校とともに、その交流をみてみたい。

国立教育研究所附属教育図書館司書時代に、1969 年 8 月に岡田温学長の招きで図書館短期大学司書講習の講師として「資料分類」と「目録法」を教えている。その後、上記でみた各大学の時代に、様々な図書館情報学教員との交流が存在することになる。

1973 年以前、1974 年から、1985 年から、1997 年から、と 4 つの時期に分けると次の通りである。なお、() 内は司書養成課程担当者名であり、「」内は長倉が担当した科目である。

【1973 年以前】

玉川大学夏季スクーリング: 1970 年 8 月(室伏武)「図書整理法」

1972 年 4 月-2002 年 3 月(笹田喜代造)「学校図書館原理」「図書館利用指導論」

1972 年 4 月-1978 年 3 月(北嶋武彦)「図書館学 I」「学校図書館通論」「学校図書館利用指導論」

1973 年 8 月 玉川大学夏季スクーリング(室伏武)「図書整理法」

【1974 年 7 月 1 日 国立教育研究所主任研究官時代】

1974 年 8 月 玉川大学夏季スクーリング(室伏武)「図書整理法」

1978 年 10 月-1979 年 3 月 学習院女子短期大学(岡田温)「図書館活動特論」

1978 年 7-9 月 図書館短期大学司書講習(岡田温)「資料の整理」

1982 年 4 月-1997 年 3 月 國學院大學栃木短期大學(彌吉光長)「図書整理法」

1982 年 4 月-1986 年 9 月 立正大学文学部(北嶋武彦)「学校図書館通論」「利用指導論」

【1985 年 4 月 1 日 東京学芸大学教育学部助教授・1987 年 2 月 1 日教授(図書館学)・1992 年 4 月 1 日大学院教育学研究科担当時代(1996 年 3 月 31 日 定年退職)】

1990 年 4 月-1999 年 3 月 東洋大学社会学部(岩淵泰郎)「情報図書館学特講 I」

1991 年 10 月-1997 年 9 月 日本女子大学人間社会学部(岡田温)「図書館活動」「学校図書館」

1993 年 10 月-1994 年 3 月 昭和女子大学短期大学部国語国文学科(上田友彦)「図書館学」

1996 年 4 月-1996 年 9 月 相模女子大学学芸学部(高橋和子)「図書館通論」

1996年7月-1997年3月 群馬大学教育学部(中森強)「図書館学」
1996年8月 沖縄国際大学短大部(須永和之「図書館学」)
1996年6月-2004年8月 新潟大学学校図書館司書教諭講習(生田孝志)「学校経営と学校図書館」
「学校図書館メディアの構成」
1996年4月-1997年3月 実践女子大学(今村秀夫)科目名記載なし 11)

【1997年4月1日 実践女子大学文学部教授(図書館学課程)時代(2003年3月31日 定年退職)】

2005年4月-2013年3月 創価大学通信教育部(中野目直明)科目名記載なし

多くの大学で様々な科目を教えているが、特に学校図書館関係科目が目を引く。長倉はこのことについて、「学校図書館学が未だ形成期にあり、その教師が非常に不足していたことと同時に、各大学で図書館学専任の教員を雇用するだけの必要を感じていなかったことを示している。」¹²⁾ といっている。

長倉にとって岡田温先生は、心優しくお世話になった大恩人だった、ときいている。そして、「図書館史」の教科書では岡田のものが素晴らしい内容であると評価していた。また、長倉にとって室伏は大きな存在であった¹³⁾。

長倉は多くの図書・論文を著し、また招かれて講演を行っている。図書のみ『留学・血筋』に掲載されているので、文末に列挙した。長倉が執筆した図書は、国立情報学研究所(Nii)のCiNii-Booksを検索すると『留学・血筋』を含めて10冊出てくる。しかし、長倉が執筆した図書は、分担したものを含めると文末のリストの通りとなる。長倉自身が記録しておかないと、このような事実は後世なかなか拾うのが困難となるだろう。

5.2 米国西海岸図書館視察

長倉は、1977年日本図書館協会主催「米国西海岸図書館見学ツアー」のツアーリーダーを務めた。リーダーは通訳も兼ねていた。この旅はアメリカ合衆国をシアトルかサンフランシスコまでバスでフリーウェイを走り、この当時アメリカで急速に広がったコンピュータによる図書館業務化とそれを支えた書誌ユーティリティ、そしてその他活発な図書館活動を見学する旅であった。アメリカ図書館の新しい動きの様々を見ることができた旅であった。当時アメリカ国内に様々な書誌ユーティリティが生まれていてOCLCもその一つであった。大学図書館、公共図書館はその書誌ユーティリティを中心にオンラインによる共同目録作業が拡がり、コンピュータを使った図書館サービスの時代へと確実に向かっていたのである。この動きの現場をいち早く見たいという図書館関係者が参加する旅であった。短期大学図書館界は当時、4年制大学より早く図書館業務のコンピュータ化に取り組んでいた(小規模ではあるが)ので、先進国の様子を見たいという短期大学図書館員の参加もあった。このような目的をもつ旅であったため、そのリーダーであった長倉は事前に情報収集をし、予備知識を持つ必要があったであろう。アメリカ図書館現場の図書館員に質問をするときに、図書館におけるコンピュータの機能や図書館業務そのものの知識は不可欠であったからである。帰国後の長倉の報告が残されている¹⁴⁾。彼女の報告にはこのツアーの特徴が端的に捉えられている。「...意外ともいえる多

大の収穫…」と、「…視察団構成メンバーは、実にユニークな特質を…」の紹介を行っている。

…目録の形態の変貌とプロセッシング(資料整理あるいは処理)の省力化の実際を目の当たりにすることができた…地域社会住民の欲求について、図書館側の多様な対応のしかたを学ぶことができた…20代後期から40代までという、…問題意識も強烈で、体力もあることから、強行軍をも辞せず、…図書館員でないメンバー…出版社社長、…建築家…社会教育委員…

そして添乗員以外の長倉を含む27名の氏名と所属を列挙し、帰国後にそれぞれが積極的にアメリカでの経験を公表していることも報じている。

図書館見学の際にしゅっちゅう図書館側の説明に出てきたベイカー・アンド・テイラーという大手取次会社は、日本では名前のみであり、その実態はまだ知られていなかった。参加者の出版社関係の2名は、急遽グループと別行動を取り、リノにある支所を見学した。その一人の小川茂男氏の報告は、当時の日本にとって貴重なものであったと思われる(15)。もう1人の晶文社社長中村勝哉氏は、見学先の質疑応答における長倉の通訳について「長倉さんは、日本語だとちゃきちゃきの江戸っ子風だけど、英語をしゃべると上品だねえ」と語った。この旅は、長倉の能力と魅力が最大限発揮された旅であったと評価できるだろう。

5.3 学校図書館: 日本と世界

学校図書館の分野を専門とし、歴史のある全国学校図書館協議会(SLA)や自らも創立者の一人であった日本学校図書館学会での活躍がある。海外研修を本格的に始めたのは、昭和48年(1973)の国際図書館連盟IFLAグルノーブル会議以降である。

彼女の業績リストの中に「海外研修旅行」という項目がある。私家版ならではの情報ではないだろうか。その項目は30項目あり、つまり30回海外に研修に出かけた。自費か公費かの別、研修先の国名、研究発表をしたか、理事会等に参加したかなどが記録されている。

国際学会での研究発表は、1980年、1982年、1983年、1984年、1985年、1986年、1988年、少しとんで1998年の7月(1983年は8月)に行っている。1980~1988年まではほとんど毎年のように活発に、いずれも国際学校図書館協会(International Association of School Librarianship: IASL 16))で発表を行った。同時に同協会の理事でもあった長倉は、1982年から1987年まで毎年理事会に出席した。学校図書館での海外の活躍は主に国際学校図書館協会(IASL)であり、以下のその活動を長倉の記録から抜き出してみる。

国別に数えてみるとアメリカ合衆国(7回数えられる)を除き、1973年のドイツ、フランスを皮切りに、ヨーロッパはフィンランド、デンマーク、ハンガリー、チェコスロバキア、アイスランド、ウェールズ、イスラエル、スウェーデン、ノルウェー、北アイルランド、スコットランド、イングランド、南北アメリカはベネズエラ、メキシコ、カナダ、ジャマイカ、アジアは中華人民共和国、タイ、マレーシア、韓国そして、オーストラリア、ニュージーランド、である。「世界中を旅できたわよ。世界中に友人もできたし」と語っていた。

1984年に東北工学院で大学図書館建築について、1987年に東北師範大学で図書館学について(い

ずれも中華人民共和国) 講義をしている。勿論以上の海外研修以外に、プライベートによる海外も多かったようだ。彼女の年代にしてはフットワークが軽く海外へ足を運んだのは、持ち前の大いなる好奇心とともに留学経験が大きかったのではないかと思われる。国内の学校図書館を海外へ導こうとした長倉は、それ故長年にわたって努力を続け、2016年の東京大会開催が実現した時は特別の思いをもったと考えられる。その報告である『カレントアウェアネス』の文末の謝辞にその思いが込められているようである(17)。

筆者はIASLの極東地域理事を4期12年間勤め、1990年に名誉会員に指名され、日本の学校図書館の国際化を長い間唱道してきた。今回第45回IASL大会を東京で開催するために総力を結集してくださった学校教育界と図書館界の多くの皆様がたへの感謝の意を表したい。

このような長倉は、文献の面でも日本の図書館関係者の目を世界に向けることに貢献した。もっとも著名なものとしては、堀川照代との共訳で知られる『ユネスコ学校図書館宣言』がある(18)。そして、『現代の図書館』に〈シリーズ・世界の図書館員教育〉として、毎回2ページで世界30か国以上の国々の図書館員教育を紹介した(19)。それは1989年に始まり、2002年まで続いた。

5.4 国際活動の集大成としてのLISSASPAC JAPAN 記念講演

このように活躍した長倉は2003年に実践女子大学を定年退職した後に、1999年11月から始めていた、特定非営利活動法人「図書館の学校」の理事として2011年12月まで関わっていた。主に読書感想文の選者として活躍したとのことであった。ここでは、所属専門団体名であるとか、それら学会の役員等のことは省きたいと思う。

晩年の公的な仕事の一つに、日本図書館研究会研究奨励賞選考委員会の選考委員であった。2019年度のみを選考委員となった。

上述したように長倉にとって海外へ出ていくことは大変軽やかなことであったようだ。様々な国の図書館を見学し、多くの図書館人と出会い交流してきたのであった。それ故、アジア太平洋図書館情報学会日本支部(LISSASPAC JAPAN) 20) 設立総会にあたり、長倉への記念講演依頼があった。設立総会は2017年8月12日(土)に大阪府立中之島図書館別館2階で開催された。講演のタイトルは「国際学校図書館協会(IASL)とアジア太平洋地域」21) であり、その内容は4つの項目に分かれている。すなわち1. アジア太平洋地域におけるIASL、2. アジア太平洋地域における学校図書館の現状、3. IASLと日本との関り、4. LISSASPACとIASLという構成である。IASLの設立者が長倉の留学先の指導教員だったことは前述したが、本人もその一人であったことを明かにしている。長倉は長年関わり名誉会員でもあるIASLとLISSASPACを、協会と学会という異なる組織であることを押さえた上で多角的に比較検討し、LISSASPACが、アジアを中心とした国際学会であることの意義について熱く語ったことは傾聴に値することであった。

6 おわりに

長倉の業績、日本の図書館界への貢献の1つに、世界の図書館紹介や図書館員教育の紹介があった。得意の英語と情報収集能力を駆使して日本の図書館界に紹介した。また、注目したいのは、長倉の同時代研究者として、今まど子、高橋和子、古賀節子、鬼頭当子たちの存在がある。友人でもあり、ライバルでもあったらしい彼女たちは、長倉とともに戦争直後から戦後に向けての図書館情報学分野の開拓者として活躍した女性たちであった。

2020年10月長倉先生ご逝去後『図書館界』に「追悼文」を投稿した(22)。長倉美恵子の人柄と業績など、読者の方々に伝えたいと思ったからであった。同時期に本誌 *Journal of I-LISS JAPAN* の大城善盛編集長から詳しい長倉に関する記事の依頼があり、ここでは確かな資料を土台としてできる限り客観的にまとめるように心掛けた。彼女の87年の生涯を描くには、私は年下の友人であったため、敬愛の念があり、あまり客観的とはいえないかもしれない。しかも学校図書館は自分の専門を超えているので、本当は長倉の本質からほど遠いことを書いているだけかも知れないという恐れが残る。しかし、改めて長倉の遺した著作、特に『留学・血筋』や「課程と私との縁」を読み返すと、人生をまとめておこうとする姿勢を強く感じるのである。これらを読み返すとある種の安堵感を覚えた。長倉の見事な人生の閉じ方を見たように思われたからだ。先生と最後の会食(京都)は2020年2月23日であったが、夫君とのなれそめを再び聞かされ、大いに盛り上がるという楽しい思い出も頂いた。この拙著では、長倉の近くにいた一人として、精一杯記述したのであるが、決して十分でないことは分かっているつもりである。長倉の学問的な評価は必ず、優れた学校図書館専門家が記してくださいを期待して、筆を置きたいと思う。

【著作目録】

(『留学・血筋』では、学術雑誌、雑誌、新聞等への掲載はなく、著作のみの掲載である。本文中で記したように CiNii-Books には『留学・血筋』を含んで10冊が検索できるのみである。しかし、長倉が作成した著作目録には、分担で担当執筆したページも詳しく記されている。なお、本稿では分担ページ以外の書誌データに少し手を加えたことをお断りしておく。)

著書

- (分担) 『世界の図書館』岡田温編 日本図書館協会 1966 (シリーズ・図書館の仕事; 2)
- (翻訳) 『大学図書館の建築』ラルフ E. エルスワース著 長倉美恵子訳 日本図書館協会 1966 103p.
- (分担) 『ブック・モバイルと貸出文庫』鈴木四郎、石井敦編 1967 日本図書館協会 (シリーズ・図書館の仕事; 15)156p
- (単著) 『学校図書館研究報告 (1) 学校図書館の運営組織: 英米両国との比較を中心に』(国立教育研究所 資料 No.48~1) 国立教育政策研究所 1973 59p
- (分担) 『社会教育・教育思潮』(日本教育の現状と展望; 3) 日本教育新聞社出版局 1975

- (翻訳) 『ハンガリーの図書館』 イエネ・キシユ著 長倉美恵子訳 日本図書館協会 1977
- (分担) 『現代学校図書館事典』 深川恒喜, 北嶋武彦, 瀬戸真編著 ぎょうせい 1982
- (分担) 『新学校図書館事典』 室伏武, 高桑康雄, 瀬戸真編 第一法規 1983
- (分担) 『学校図書館法改正: その課題と展望』 全国学校図書館協議会編・刊 1983
- (単著) 『世界の学校図書館』 全国学校図書館協議会 1984 217p
- (分担) *Kids and Libraries: Selections from Emergency Librarian.* Ed. By Ken Haycock and Carol-Ann Haycock. Vancouver, Dyad Services, 1984
- (分担) 『学校図書館の原理と運営』 「学校図書館学」編集委員会編 (学校図書館学; 1) 全国学校図書館協議会 1985
- (単著) 『教育情報シソーラス』 (学校図書館運営実務百科 2IV-7) 第一法規 1986 18p
- (分担) 『新任研修読本』 (教職研修総合特集; No.30) 教育開発研究所 1987
- (分担) 『日本における図書館行政とその施策』 日本図書館学会研究委員会編 (論集・図書館学研究の歩み; 第8集) 日外アソシエーツ 1988
- (分担) *Books and Borrowers: Essays presented to Margot Nilson.* Ed. By Ann Taylor. “Swedish children’s literature in Japan” The Queen’s University of Belfast, Northern Iceland, 1988
- (分担) *Vices From Around the World: Selections form the Annual Proceedings of the International Association of School Librarianship.* Ed. By Philomena Hauck. “National standard curriculum for library skills instruction in Japan: Developments and contents.” Metuchen, N. J. & London, Scarecrow Press, 1989
- (分担) *The School Library Program in the Curriculum.* Ed. By Ken Haycock. “Attitudes of school librarians towards networking and teacher utilization; A Comparative study of ten countries” Englewood, Colorado, Libraries Unlimited, 1990
- (共編著) *School Libraries: International Developments.* 2nd ed. By Jean E. Lowrie and Mieko Nagakura Metuchen, N. J. & London, Scarecrow Press, 1991, 393p
- (単著) 『索引・抄録の作り方 [抄録]』 (学校図書館運営実務百科 2IV-9) 第一法規 1993 16p
- (共編著) 『学校図書館の指導と経営』 黒岩高明, 古賀節子, 長倉美恵子編著 (教職研修実践ハンドブック; No.1) 教育開発研究所 1994
- (分担) 『子どもと本をつなぐ学校図書館』 黒澤浩編著 草土文化 1995
- (翻訳) 『読書はパワー』 スティーブン・クラッシュェン著 長倉美恵子, 黒澤浩, 塚原博共訳 金の星社 1996 166p
- (分担) 『司書教諭の任務と職務』 全国学校図書館協議会編・刊 1997
- (分担) 『学校図書館入門: 子どもと本と教育をつなぐ』 黒澤浩編著 草土文化 1998
- (分担) 『図書館概論』 北嶋武彦編著 (新・現代図書館学講座; 2) 東京書籍 1998
- (共編著) 『子どもが生きる学校図書館』 熱海則夫, 長倉美恵子編著 ぎょうせい 1999 384p
- (分担) 『新学校図書館通論』 図書館教育研究会編 学芸図書 1999
- (分担) 『新学校図書館入門: 子どもと教師のまなびをささえる』 黒澤浩編著 草土文化 2001

- (編著)『子どもの読書活動をどう進めるのか: 心の糧は読書から: 子どもの「読書離れ」を克服する方途』(教職研修総合特集; No.158) 教育開発研究所 2003 221p
- (分担)『新・子どもの本と読書の事典』ポプラ社 2004
- (分担)『新訂図書館概論』北嶋武彦編著(新・現代図書館学講座; 2) 東京書籍 2005
- (分担)『新学校図書館通論 改訂版』図書館教育研究会編 学芸図書 2006
- (分担)『読書と豊かな人間性』「新学校図書館学」編集委員会編(新学校図書館学; 4) 全国学校図書館協議会 2006
- (分担)『新学校図書館通論 三訂版』図書館教育研究会編 学芸図書 2009

注

- 1)『長倉美恵子教授最終講義』は、9p. 表紙には、「2003年1月14日(火)午後1時～2時30分 実践女子大3館321教室 実践女子大学教職・図書館学課程」と記され、参考資料が9点掲載されている。
- 2) 現在、国立国会図書館、京都大学教育学部図書室、国立女性教育会館女性教育情報センターの3カ所に所蔵されているのみである。
- 3)「課程と私との縁」p.9『実践女子大学大学短大図書館学課程50周年記念誌1967～2017』実践女子大学図書館学課程・実践女子大学短期大学部図書館学課程, 2018, 84p.
- 4) 前掲3) p.10.
- 5)『留学・血筋』p.6.
- 6) 前掲5) p.6.
- 7) 前掲5) p.78-92.「西ミシガン大学図書館学科年代記」は p.77.
- 8) アメリカの絵本作家。『セシのポーサダの日』でカルデコット賞受賞。作品に『もりのなか』『わたしとあそんで』など。
- 9) 前掲5) p.8.
- 10)『教育学研究年報』16, 1997.7.
- 11)「図書および図書館史」「情報管理」、短大で「図書館活動」前掲3) p.10
「...今村(秀夫)先生は...「再来年に実践を定年になるのよ。来年1年間、非常勤でおしえてみてよかったら、後任になってよ」と言われたのである。なんだか「瓢箪から駒」のようななりゆきであった。」と、この期間実践女子大学で教えた理由が記されている。
- 12) 前掲5) p.4.
- 13) 長倉美恵子「令和元年度日本学校図書館学会定期総会記念講演 学校図書館学研究の道 室伏武先生へのオマージュ」『学校図書館学研究』22, 2020. 3, p.5-11.
- 14) 長倉美恵子「変ぼうする目録形態とプロセッシング: 米国西海岸図書館視察団報告1(目録の機械化<特集>)」『現代の図書館』15(4), 1977.12, p.212-214.
- 15) 小川茂男「図書館専門の大卸売会社ベーカー&テイラー社について: 米国西海岸図書館事情視察旅行に参加して」(目録の機械化<特集>)『現代の図書館』15(4), 1977.12, p.233-239.

- 16) 長倉の留学した「西ミシガン大学図書館学科の主任教授であった Dr. Jean E. Lowrie とその教え子達によって 1972 年に創設された国際研究団体である。」前掲 5)p.4.
- 17) 「国際化へと始動した日本の学校図書館: 国際学校図書館協会とその東京大会」『カレントアウェアネス』 330, 2016.12.20, p.8-9.
- 18) 長倉美恵子, 堀川照代共訳「ユネスコ学校図書館宣言: すべての者の教育と学習のための学校図書館 (School Library Manifesto Ratified by UNESCO)」『図書館雑誌』 94(3), 2000.3, p.170-171.
- 19) 『現代の図書館』において, 「シリーズ・世界の図書館員教育」を 1989 年から 2002 年まで 31 回にわたり紹介。1 ナイジェリア 2 ケニア 3 ノルウェー 4 スウェーデン 6 中国 7 インド 8 オランダ 9 エジプト 10 バングラデシュ 11 ヨルダン 12 カタール 13 ガーナ 14 オーストラリア 15 南太平洋地域 16 エチオピア 17 モロッコ 18 アイスランド 19 トルコ 20 ポーランド 21 ロシア 22 インドネシア 23 ボツワナ 24 サウジアラビア 25 リビア 26 ドイツ 27 パキスタン 28 ヴェトナム 29 カーマニー・サクチャローン 30 スペイン 31 メキシコ (5 は未確認)
- 20) LISSASPAC は, 2015 年 6 月インドの SRM 大学を会場として開催された, 第 2 回 International Conference on Innovation Driven Librarianship (ICIDL) の場で設立宣言された新しい図書館情報学研究者のための学会。設立メンバーの 1 人に, 日本からは志保田務 (桃山学院大学名誉教授) が副会長として加わっている。日本支部は, 2016 年 7 月に志保田を支部長として設立された。詳しくは以下参照。前川和子「LISSASPAC 日本支部設立会・記念研究講演会<報告>」『カレントアウェアネス』 335, 2017.10.19.
LISSASPAC は, 2018 年に I-LISS (国際図書館情報学会) と名称変更した。
- 21) 記念講演「国際学校図書館協会 (IASL) とアジア太平洋地域」『Journal of LISSASPAC JAPAN: アジア太平洋図書館情報学会日本支部誌』 1(1), 2017, p.14-22.
- 22) 前川和子「追悼 長倉美恵子先生の思い出」『図書館界』 72(5), 2021, p.233-234.